



防衛省東北防衛局広報紙

東北のかなめ

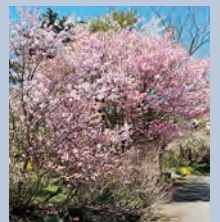
vol.49 (2020.4)



約9年ぶりに全線運転が再開された常磐線「特急ひたち」(3.17福島県いわき駅)

【CONTENTS】

- ✓ 第40回防衛セミナーin仙台
- ✓ 令和元年度版 防衛白書説明
- ✓ トピックス
 - ・ 令和元年度三沢飛行場周辺航空事故連絡協議会
 - ・ 新幹部紹介(令和2年4月1日付着任)
 - ・ 日米交流事業「第8回MISAWAアイスホッケー2020」
 - ・ 「朝雲賞・優秀掲載賞」4年連続受賞
- ✓ ようこそわが街へ(第19回) ～青森県三戸町～
- ✓ 防衛関連企業シリーズ②：古河電池(株) いわき事業所
- ✓ インフォメーション



名勝・榴ヶ岡公園の桜
(仙台市宮城野区)

第40回防衛セミナーin仙台

1月22日、仙台市宮城野区文化センターにて、第40回防衛セミナーin仙台を開催し、約140名もの方がご来場されました。主催者である熊谷昌司東北防衛局長の挨拶に続き、宮城県総務部危機管理監の東海林清弘氏(村井嘉浩宮城県知事代理)、仙台市危機管理室長の柊川佳孝氏(郡和子仙台市長代理)が来賓を代表して挨拶を行いました。

今回の防衛セミナーでは、防衛省整備計画局防衛計画課の谷本充也企画調整官から「新たな『防衛計画の大綱』『中期防衛力整備計画』を、陸上自衛隊東北方面総監部幕僚長兼仙台駐屯地司令の牛嶋築陸将補から「陸上自衛隊の取組と仙台駐屯地と地域との関わり」について講演があり、ご来場の方々は熱心に耳を傾けられ、講演後に質問される聴講者もおられました。



主催者挨拶 熊谷東北防衛局長



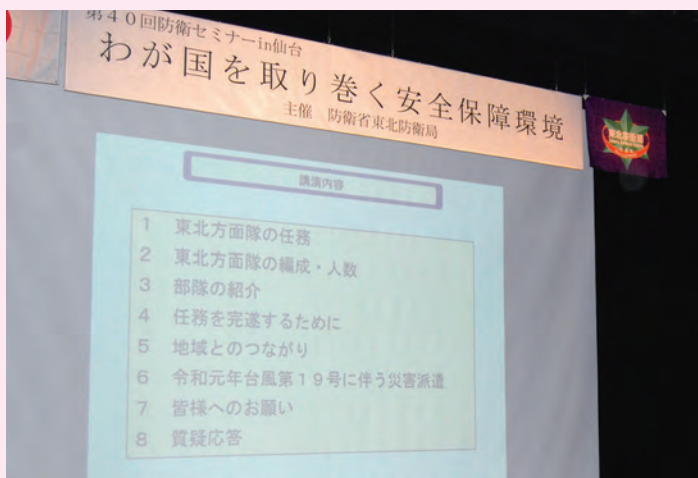
宮城県 東海林危機管理監



仙台市 柊川危機管理室長



防衛省整備計画局防衛計画課
谷本企画調整官



東北方面総監部幕僚長兼仙台駐屯地司令
牛嶋陸将補

聴講者からは、「安全保障環境について理解が深まった」「地元協力への実態がよく分かった」「防衛計画の大綱・中期防衛力整備計画の大きな視点と、仙台駐屯地に関する小さな視点から学ぶことができた」など、様々な感想が寄せられました。今後も、防衛政策や自衛隊の活動について、国民に広く理解してもらうことを目的に、東北各地で「防衛セミナー」の開催を予定しておりますので、ご来場お待ちしております。

東北防衛局は管内の自治体に対し、昨年から2月にかけて、令和元年度版防衛白書説明を実施しました。防衛白書は、政府の施策の現状について、国民に周知させることを主眼に作成しています。

令和元年度版防衛白書説明は、新防衛大綱及び新中期防について詳細に説明しています。また、新防衛大綱で重視されている米国、中国、北朝鮮及びロシアの動向に加え、宇宙、サイバー、電磁波といった新たな領域や軍事技術をめぐる動向についても詳細に説明しています。



岩手県 達増知事(1.12.27)



山形県 吉村知事(2.1.7)



宮城県 佐野副知事(2.1.14)



青森県 三村知事(2.2.28)



今回の特色は、一昨年12月に「防衛計画の大綱」及び「中期防衛力整備計画」が策定されて以降、初の刊行であること、また、新元号の下での初の防衛白書であることから、新たな時代の始まりをイメージした表紙となっています。

昨年好評をいただいたAR動画アプリをインストールすることで、様々な動画がご覧いただけます。

※ 詳しくは
防衛省HP→
をご覧ください



令和元年度三沢飛行場周辺航空事故連絡協議会の開催

1月27日、青森県三沢市国際交流教育センターにて、「令和元年度三沢飛行場周辺航空事故連絡協議会」が開催されました。この協議会は、三沢飛行場周辺において、米軍機、自衛隊機又は民間機の航空事故及び事故に伴う災害が発生した場合の対処や関係機関相互の緊密かつ迅速な連絡調整の体制整備について協議することを目的に、昭和54年から開催しており、今年で42回目です。会議には、三沢飛行場周辺の自治体、米軍、航空自衛隊、警察、消防など計28機関から、あわせて約60名が出席しました。

冒頭、主催者を代表して東北防衛局の藤井真企画部長が挨拶し、続いて構成機関からの業務等説明では、まず当局の斗石弘之業務課長から「米軍機事故に関するガイドラインの改正について」、次に米空軍第35戦闘航空団安全部長のジェームス・デービス少佐から「第35戦闘航空団航空機事故対応」、最後に三沢市消防本部警防課長の浅野一雄氏から「三沢市消防本部の業務概要」について、それぞれ説明が行われました。参加者はメモを取るなどして、熱心に耳を傾けていました。

主催者あいさつ



東北防衛局
藤井企画部長



東北防衛局
斗石業務課長



米空軍第35戦闘航空団
安全部長デービス少佐



三沢市消防本部
浅野警防課長

今後とも継続して本協議会を開催するとともに、内容の充実に努め、事故対応への関係機関の相互理解及び連携の強化に取り組んでまいります。

新幹部紹介(令和2年4月1日付着任)



企画部長 武田 和仁
【前職：東北防衛局企画部次長】



調達部長 菅野 俊也
【前職：本省地方協力局地方調整課計画調整室長】



企画部次長 佐藤 彰悦
【前職：本省地方協力局地方調整課企画官】



企画部次長 緒方 康人
【前職：北関東防衛局地方調整課長】

日米交流事業「第8回 MISAWAアイスホッケー2020」

2月8日、青森県三沢市の三沢アイスアリーナにて、米軍三沢基地及びその周辺に在住する日米の小学生を対象に「第8回MISAWAアイスホッケー2020」が開催されました。三沢市の特産であるホッキ貝を模したパックを使用した「アイスホッケー」は、地元特産品の「にんにく」形のヘルメットをかぶり、「長芋」形のスティックで得点を競い合う、長靴などを履いて行うアイスホッケーで、日本側11チーム、米側4チーム、日米混合3チームの計18チーム、約140名の子供たちが参加しました。



子供たちが不規則に転がるホッキ貝形のパックに悪戦苦闘、転倒しながらも懸命にゴールを狙う姿に、会場は大いに盛り上がりました。高学年の部は、日米混合チーム「岡三沢ホッケースポーツ少年団A」、低学年の部は、日本側チーム「はまなすガッツ」がそれぞれ優勝し、米側チーム「Snow Cats」も低学年チームで2位に入るなど、日米の子供たちが交流を深めながら、楽しい1日を過ごしました。

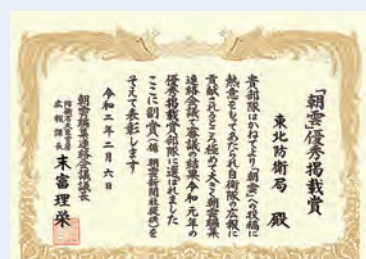
※東北町で予定されていた「ひなまつり in Tohoku Town 2020」は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止いたしました。東北町及び関係者の皆様のご理解に感謝申し上げます。

「朝雲賞・優秀掲載賞」4年連続受賞

朝雲新聞社では、毎年「朝雲」に掲載された部隊や機関などからの優れた投稿記事や写真を表彰する「朝雲賞」を実施しています。「記事賞」「写真賞」「個人投稿賞」「掲載賞」の4部門があり、昨年(2019年1月～12月)、朝雲新聞への掲載が最も多かった「掲載賞」の地方防衛局部門で、東北防衛局が4年連続の「優秀掲載賞」を受賞しました。昨年1年間で、当局投稿記事が13件掲載されました。

「朝雲賞」は、昭和34年に始まった制度であり、「地方防衛局部門」は東北防衛局の要望で平成28年2月に新設されました。

平成29年以降、全ての地方防衛局の前年投稿分が受賞対象とされ、最も多く紙面を飾った地方防衛局に「優秀掲載賞」が表彰されます。

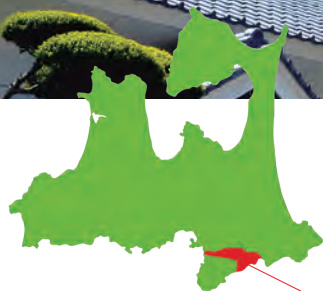


(⇒右:「表彰状」と記念品「盾」)

11ぴきのねこのまちさんのへ



三戸町公式HP
はこちらから



三戸町は青森県の南端に位置し、南は岩手県との、西の一部は秋田県との県境となっています。町のメインストリートは、江戸時代の国道のひとつである旧奥州街道であり、現在は町の中央を国道4号、国道104号線が交差するほか、青い森鉄道線も町内を縦断しており、三戸地方の交通の中心となっています。人口は1万人ほどで、面積の7割を山林や原野が占めており、四季折々の風景を楽しむ自然豊かな町です。

三戸町は戦国時代、北東北一帯を支配していた三戸南部氏の居城であった三戸城が築かれ、城下町として栄えた歴史ある町です。城跡は現在、ソメイヨシノをはじめ様々な種類の桜が咲き誇る桜の名所「城山公園」として整備されており、遊具や鹿園、町立歴史民俗資料館もあり、子どもから大人まで楽しむことができる憩いの場です。石垣や堀跡などの遺構も多く見られ、歴史ファンも訪れます。平成31年4月で町制施行130周年を迎えた歴史ある町です。



町は農業が盛んで、おいしい野菜や果物がたくさん実ります。中でも、蜜がギュッと詰まったリングは絶品です。山に囲まれた地形により、昼夜の寒暖の差が激しく、甘みが強い果物ができるのです。



また、かつては「やませ」と呼ばれる冷たい季節風により、稲作に適さなかったことから、麦、そば、雑穀などを粉にして調理する「粉もの料理」が発達しました。粉もの文化は今も根付いており、子どもからお年寄りまで親しんでいるソウルフードがたくさんあります。サクサク軽い口当たりの「三戸せんべい」は、製造・販売する店が町内に5店舗。それぞれの店によって味や食感が違うので、食べ比べてみるのも楽しいです。その他、エゴマみそやくるみみそを付けて炭火で焼いた「串もち」、くるみとごま、砂糖のとりりとしたあんをもちで包んでゆであげた「きんかもち」、だしのきいた汁で煮込んだ家庭の味「ひつつみ」、練った小麦粉の生地を三角形に切ってゆでたものに、ニンニクみそを付けて食べる「つつけ」など、多くのおいしいものがあります。

三戸町は、人気絵本「11ぴきのねこ」シリーズの作者・馬場のぼる先生が生まれ育った町で、馬場先生の偉業に感謝し、「11ぴきのねこ」を活用したまちづくりを進めています。町を歩くと11ぴきのねこの石像や街灯フラッグ、各商店の店頭幕、観光案内版など、さまざまなところで、かわいらしいねこたちに会うことができます。

最近では、令和元年10月から、青い森鉄道といわて銀河鉄道の路線(青森～三戸～盛岡)を「11ぴきのねこラッピングトレイン」が運行しています。沿線の皆さんをはじめ、全国の人たちや、11ぴきのねこファンの皆さんに、三戸町のことを、もっと知ってもらうため、元気に走っています。皆さんも、ほっこり楽しい「11ぴきのねこラッピングトレイン」に乗って、三戸町に遊びにきてください。かわいらしいねこたちが、皆さんを待っています。

11ぴきのねこラッピングトレインの運行予定については、青い森鉄道株式会社の公式ホームページからご確認いただけます。(http://aomorirailway.com/archives/20805)



1950年、古河電気工業(株)の電池部門が独立して設立された古河電池(株)は、福島県いわき事業所において、ブルーインパルスなどの自衛隊機にも使用される航空機用蓄電池(アルカリ蓄電池)、自動車・二輪車用、鉄道車両用、産業用、非常用・防災用などの電池・バッテリーや電源装置を製造しています。

古河電池(株)が開発・製造した「はやぶさ2」用リチウムイオン電池は、探査機に搭載した太陽電池パドルが電力を供給できない場面で、代わりに電力を供給する縁の下の力もち的な役割を担い、主に「打ち上げ直後」、「地球スイングバイ(重力を利用して行う軌道制御)」、「緊急時のセーフホールド(探査機の姿勢を元に戻す動作)」といった3つの場面があります。「はやぶさ2」リチウムイオン電池に携わった同社の開発統括部LM開発部の小出和也氏、近藤宏篤氏にお話を伺いました。

Q1：「はやぶさ2」電池の開発・製造に携わることになった経緯について。

A1：1970年代、防衛庁(当時)向けニッケル・カドミウム蓄電池を国内で唯一手掛けていたこともあり、国産初の衛星を開発する主体であった東京大学宇宙航空研究所(当時)の開発要請を受けて、日本初の科学衛星「しんせい」に当社の電池が使用されました。これを機に、JAXA宇宙科学研究所(JAXA/ISAS)との付き合いが始まり、「初代はやぶさ」にも当社の世界初宇宙用リチウムイオン二次電池が搭載され、2011年からは「はやぶさ2」用リチウムイオン電池の開発・製造に携わることになりました。



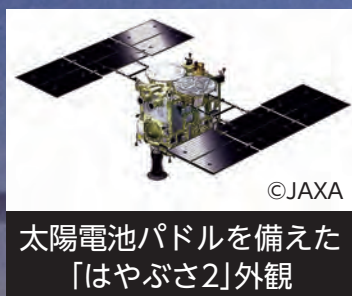
近藤氏 小出氏

Q2：「はやぶさ2」電池の開発・製造の過程でどのような苦労がありましたか。

A2：設計段階で、重量を変えずに容量を約20%増加できないか、と相談されました。削りに削って、小さく、軽くした宇宙用電池を、更に容量だけ増加することに、設計者は頭を悩ませました。JAXA/ISASとの詰めに詰めた最終調整の結果、打ち上げ時だけ充電の制御を上げるという特別なモードを搭載することで解決することができました。「はやぶさ2」には、リチウムイオン電池を11個直列接続したバッテリーが搭載されています。

Q3：今年末、「はやぶさ2」が地球に帰還予定ですが、今でも運用に携わっているのですか。

A3：現在は、地上で同型の電池を疑似環境でシミュレーションさせることで、搭載されたバッテリーの状態をいち早く把握・フィードバックし、万全の体制で運用できるよう支援しています。また、実際の宇宙環境では、当初の予定や予想と異なることもあり、迅速に修正できるよう日夜努力しています。現在、報道にもあるとおり、追加ミッションが検討されており、今後どれだけ寿命を延ばすことができるか運用方法を検討することも求められると思います。宇宙プロジェクトは、宇宙以外の知識や経験も必要ですから、新たな技術を生む挑戦が重要ですが、一方で日本が世界をリードする人と技術の土台を形成できるよう、挑戦する姿勢や風土を後世に繋げることもまた重要です。私たちは「電池」という切り口で宇宙に挑戦・継続をしていきます。



©JAXA

太陽電池パドルを備えた「はやぶさ2」外観



©JAXA

探査対象小惑星
リュウグウ到着



©JAXA

地球スイングバイ



リチウムイオン電池
セル

三沢・八戸・松島の各飛行場周辺、三沢対地射爆撃場周辺及び王城寺原演習場周辺に「周辺財産」(移転補償跡地)と呼ばれる国有地があります。

この「周辺財産」は、航空機や砲撃等の音響による障害が特に著しいと指定された区域で、移転等を希望された方の土地を国が買い入れ、緩衝地帯として管理・保有している防衛省所管の行政財産です。

当局では、土地の有効活用を図る観点から、買い入れた土地の行政目的を妨げない範囲で、地方公共団体等への公共的な目的による使用許可のほか、**新たに個人、企業等に対しても、一定の条件の下、有償での使用許可を行うこととしています。**

○ 使用許可の前提条件

- ・居住の目的では利用できません。
- ・原状回復が容易な利用に限ります。(プレハブ・舗装・簡易な工作物等の設置は可能です。利用の方法としては、駐車場、車両置き場、家庭菜園、物置等の設置、資材置き場などが考えられます。)
- ・利用の申し出があった場合は、内容を審査した上、公平性・透明性を確保するため、公募を行います。
- ・使用許可期間は、原則として5年以内です。(国側において当該土地の利用需要が発生しない場合に限り、一度に限り更新が可能。更新後の使用許可満了後も引き続き使用要望がある場合は、期間満了時に再度、公募を行います。)
- ・使用料は年度ごとの納入となります。



使用許可地(駐車場)



周辺財産(空地)

○ 詳しくは、当局HP
をご覧ください ↓



お問い合わせ先：東北防衛局 企画部 施設管理課
緑化対策係 電話：022-297-8213

編集後記

表紙の写真は、3月14日に全線運転が再開されたばかりの常磐線「特急ひたち号」を撮影したものです。福島県沿岸(浜通り)の浪江駅から富岡駅間20.8キロメートルの常磐線の営業が約9年ぶりに再開されたことにより、2011年3月の東日本大震災と福島第一原発事故の影響で運転を休止していた東北の鉄道路線が、すべて復旧しました。

運転再開前、放射線量の高い帰還困難区域を含む浪江・富岡間の代行バスに乗車した時に見た風景は、約9年前の日常生活が目に浮かぶようでした。故郷を奪われた住民の方々の思いはいかばかりかと思うと同時に、この9年間、運転再開に向けて、危険で過酷な除染作業を行った方々の努力に頭が下がります。

東京都内と仙台を約4時間半で結ぶ直通特急ひたち号は、1日3往復運行されていて、復興に携わる人を運び、福島県浜通りの生活圏再形成につながることを期待されています。皆さんも全線運転が再開された常磐線で、この地を訪れてみてはいかがでしょうか。

